



コロナ禍の教育

ーリモート教育は「暴力」からの解放であるー

齋 藤 環 筑波大学医学医療系社会精神保健学教授

1. はじめに

コロナ禍は政治、産業、医療、福祉などあらゆる領域に甚大な影響を及ぼしつつある。もちろん教育もその一つだ。小中高は休校に踏み切る決断も早かったが、第二波の渦中とされる現時点でも、ほぼすべての学校が登校を再開している。最も気の毒なのは大学生で、後期も対面授業は再開されずリモート授業が継続される大学が大半を占めるようだ。大学生は出身地も居住地も広範囲にわたり、活動も交流も中高生よりはずっと活発と想定されるのだからやむを得ないという事情はわかるが、自宅で膨大なオンデマンドやZoomの動画を視聴し、山のようにレポートを孤独にこなし続けるストレスを考えると、せめて授業料の減免措置くらいはあってもいいのでは、と大学教員としては考えてしまう。

ただし、悪いことばかりではない。休校やリモート授業は、一部の子供にとっては大きな救済策でもあった。たとえば、不登校の子

にとってはプラス面もあったことは良く知られている。私が診療している範囲でも、対人恐ろしい葛藤ゆえに登校できずにいた学生が、自粛期間中に元気を回復して、対面授業再開後は授業に参加できるようになったケースが複数ある。

登校再開を報ずるニュースでは、ひさびさに友達に再会した子どもたちが喜びはしゃぐ姿を強調するものが多かった。その反面、必ずしも再開を手放しで喜べない子どもたちも少なくなかったことは想像に難くない。不登校の子にとっては、このままずっとリモート授業が続いてほしいという思いもあったはずだ。学校側も再開を喜ぶマジョリティの子どものおかげに、複雑な思いを抱えた多くの子どもたちの存在を見て欲しかった。

2. 学校という暴力空間

先生方には、この機会に、ぜひ考えて欲しいことがある。

それは、一部の子どもにとって「学校」はきわめて暴力的な空間である、という事実について、である。「一部の子」などとぼかした言い方はすまい。なにより私自身にとって、学校空間は恐るべき暴力に満ちていた。小中高から大学に至るまで。

いじめの話かと思われただろうか？ それもある。しかし、それだけではない。なるほど、確かに私は部活で先輩にカツアゲされるなどの被害経験を持っている。しかし、いじめならまだ解決可能だ。現に私は、カツアゲの件をただちに顧問の教師にチクリ、先輩方は嚴重注意を受けた。私は誇り高い中学生だったので「こういうくだらない連中のために、高貴な私の時間を一分たりとも割くわけにはいかない」と考えていたのだ。もしも学校が動かなければ、警察に通報することも辞さない勢いだった。

そうした本物の野蛮さとは別に、学校空間は隠微な暴力の温床だった。他人の容姿をあげつらう、キャラをいじる、失敗を集団で嘲笑する、空気を読まない生徒をシカトする、本人が傷つくようなあだ名で呼ぶ、などなど。もちろん私の学生時代にも、それなりに楽しいこと、甘酸っぱいこと、わくわくすることがまるでなかったとは言わない。しかし、もう二度と思春期を繰り返したいとは思わない。絶対にごめんである。私は大人になって本当に良かったと思っている。

大人世界の暴力は、教室のそれに比べればたかが知れている。なるほど、確かにブラックな職場やら上司のハラスメントといった問題はあろう。しかし大人は、暴力やハラスメントを受けない権利を主張できる。加害

があれば訴え出ることができるし、嫌な職場をやめることだってできる。義務教育として課せられ逃げようのない無法地帯の教室に比べ、大人の世界にはルールがあるだけましなのだ。

私と同じような理由で、教室という空間を恐れる生徒が大勢いる。私が経験した暴力など生やさしいレベルだ。暴力への恐怖は、それを抑え込むルールの不在によって増幅される。いじめ被害一つ取っても、訴えがまともに相手にされないこと、「いじめられる側の原因」を説教されること、あげくは加害者と被害者がなぜか互いに謝罪し合って、握手して解決、のような奇習が一部の学校では遺残しているとの報道もあった。生徒を守るべき学校側が、暴力を容認しているのだ。

教員からの暴力もある。「指導という名のハラスメント」だ。「指導」という、定義を持たず恣意的解釈に開かれたマジックワードが、数多の体罰、モラハラ、セクハラを隠蔽してきた事実がある。うちはそんな指導はしていない？ それは大変結構だが、たとえ一部であってもそういう教員が存在し、そうした教員が謝罪はおろか、なんら処分すら受けずに済むという教育システムが問題なのだ。例えば教師による生徒へのセクハラは、立場を利用した卑劣な性犯罪にほかならないが、しばしば隠蔽される。また犯罪が発覚して職場を離れても、現行法では3年後に職場復帰できるのだ。私はこうした環境を「無法地帯」と呼ぶが、同意していただけるだろうか？

あるいは近年目につく傾向として「指導死」が挙げられる。教員によるゆきすぎた「指導」で生徒が自殺を試みる事件が起きている。ほ

ばハラスメント同然の言動までも包摂する「指導」という語の利便性には感嘆を禁じえないが、もちろんこれも暴力である。

いじめ加害者やハラスメント加害者は、大人の社会であれば処罰や処分の対象となり得る。しかし学校空間に限って言えば、そうなる可能性はきわめて低い。理由は簡単で、処罰や処分のためのルールが存在しないからだ。服装や髪型に関する煩雑かつ些末な校則が残遺するさまは非行華やかかりし昭和文化的名残を思わせるが、もちろんこれも暴力である。いったい日本以外のどこの国が、「地毛証明書」の提出などという暴力を生徒に強いているだろうか。

3. リモート導入はなぜ遅れるか

お気づきだろうか。これまで私があげつらってきた「暴力」は、リモートではほぼ回避できるのだ。だからこそ一部の生徒は、リモートで息を吹き返すのである。暴力から解放されたのだから当然である。リモートの恩恵を受けられる生徒がいるのなら、なぜ登校再開後も、そうしたサービスを維持できないのだろうか。「真面目に登校している生徒が不公平感を覚える」という理由ならば語るに落ちている。その言は「登校は苦役」と認めたも同然ではないか。

実際には、多くの学校空間でリモート授業の導入はうまくいかなかったという。例えば、一部の学校で先進的なリモート教育を取り入れても、他の学校の保護者から不満が殺到するため、横並びで自粛せざるを得ないのだという。学校間の同調圧力がリモート教育の普及を阻んでいるとしたら、「情けない」

以外の感想が出てこない。同調するにしても、なぜ低い水準に合わせるのか。進んだ教育のほうに追従するのが生徒のためではなかったのか。

以前から指摘があるように、学校現場でのICT化の遅れも問題である。2018年に行われたPISAのICT活用調査によると、日本は授業中のデジタル機器使用時間がOECD加盟国の中で最下位だった。そもそも現場の教師がICT機器を使いこなせていないという指摘もある。確かにICT導入期は授業のシステム全体を再構成したりインフラを整備したりなどの手間はかかる。故障などのトラブルにスムーズに対応できない点も遅れの原因となるであろう。導入期においては、デジタルよりも使いなれた黒板やプリントを使うほうが「話が早い」と錯覚されやすい（医療現場も同様である）。しかし長期的視野に立つならば、ICT化の趨勢はもはや避けられない。再び教員の世代交代を待つような時間的猶予はないと私は考えている。

私は数年前から、「N高校」（これが実名である）という通信制高校のアドバイザーを担当している。IT系の専門家講師を数多く抱え、高卒の単位は最短コースで取得した上で、じっくり専門教育をほどこそうという方針を取っており、近年は東大や慶大などの有名校の合格者も輩出している。N高校は、学校空間から「対面」という縛りを取り除くことで、学校がいかに自由な空間になりうるかという構想を実証して見せた。コロナ禍を予見したかのようなこうした学校空間へのニーズはますます高まることが予想される。すでに生徒数は1万5千人を超えた（2020年4

月現在)。それは特殊な学校のこと、とあっさり割り切らないで欲しい。

すべてとは言えないまでも、一部の学校ではリモート授業のインフラを整備し、実践を重ねてきたはずである。そのメリットとデメリットを検証し、とくにそれによって救われた子どもたちの声にしっかり耳を傾けて欲しい。「対面は暴力」という私の言葉を単なる

極論と片付けず、そう感じてしまう子どもたちとともに、「暴力」とのつきあい方を学んで欲しい。現在が未曾有の事態である以上、教師だからと一方向的に「教える」ことは不可能だ。新しい経験から、子どもたちとともに「学ぶ」ことこそが、真の意味で有益なICT化の鍵となるだろう。

執筆者プロフィール

筑波大学医学研究科博士課程修了。筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。精神科指定医、精神科専門医。専門は思春期・青年期の精神病理学、「ひきこもり」の治療・支援ならびに啓蒙活動。ゲームやアニメなど、サブカルチャーにも造詣が深い。著書に、『オープンダイアログとは何か(医学書院)』『人間にとって健康とは何か(PHP新書)』、『ひきこもりはなぜ「治る」のか?—精神分析的アプローチ(中央法規出版 ちくま文庫)』『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析(角川書店)』ほか多数。

教育研究所 2020年教育討論会(オンライン開催) 「教育の情報化—コロナ禍に向き合う学校—」

主 催：(一財)神奈川県高等学校教育会館教育研究所
共 催：教育文化総合研究所 後援：神奈川県教育文化研究所
日 時：11月14日(土) 13:00開始(12:45よりログイン可能) 16:00終了予定
開催方法：Zoomによるオンライン討論会
参加費：無料 定員 先着100人
講 師：坂本 旬さん(法政大学)
報 告 者：現場教職員

【参加申込】

下のQRコードから参加者ごとにお申込ください。メールで申込む場合はメールの件名を「教育討論会参加希望」とし「①氏名、②所属、③連絡先」を下記mailアドレスへお送りください。申込者には、討論会当日までにZoomのURLなどをメールでお送りします。

【お問い合わせ】

(一財)神奈川県高等学校教育会館教育研究所
TEL：045-231-2546

ゼロイチゼロロク
E-mail：GAE02106@nifty.ne.jp

メールアドレスは半角でご入力ください

